

東京都渋谷公園通りギャラリー

交流プログラム 「渋谷ラジオ」

令和6年度番組 「展覧会のあと」

ゲスト5：米田昌功さんをお招きした回のうち、#20のテキストです。

○河原 「Echo こだま返る風景」は、国内外のアール・ブリュットの動向において、長く活動続ける作家と、近年発表の場を広げつつある作家を、様々な角度から紹介する展覧会シリーズ「アール・ブリュット ゼン&ナウ」の2回目に当たる展覧会でした。

この展覧会は、建物や家が立ち並ぶ街の風景を、独自のまなざしで再構築する作家たちを紹介しました。例えば、上空から俯瞰するような構図や天地のない描き方、奇抜な色彩の建物群など、それぞれにユニークな表現が見られましたが、米田さんはこの展覧会をご覧になっていかがでしたか。

○米田 いや、もう本当に面白い企画だなと思って、結局2回行きました、私。

○河原 あっ、そうか、1回お会いして。

○米田 そうそう。次に、多分娘を連れて。

○河原 そうか、2回目。

○米田 2回目。ああ、そうか。そうですね。1回目はね、あんまり時間がなくて、ちょっとゆっくり見られなかったんで、改めて来て見させていただいたんですけど。どんな展覧会になるのかなというのは、自分がココペリの展覧会でお世話になった古久保さんとか辻さんとかがいたのも、その作品をまた違う、そのときのものとはまた違う作品を見られたというのも面白かったんですけど、最初に「こだま返る風景」という題名を聞いたときに、何かエコーやから、山に向かってこう言って、返ってくる、そういう残響みたいなイメージかなと思って見に行ったら、そうではなくて、スカッシュみたいな。(笑)

○河原 スカッシュ。

○米田 あちこちにぶち当たって、返ってきて。(笑)

○河原 (笑)

○米田 いろんなところから残響が聞こえてくるような。それぞれのすごく個性が、作品の個性が際立っていて、皆さん。みんなが出すいろんな波紋みたいなのが重なり合って、鑑賞者の耳に入ってくるような空間性があって、すごく、あの建物もそうなんだと思うんですけど、建物の個性も。(笑)

○河原 （笑） 確かに。

○米田 とても面白いなと。本当に初めて足を運ばせてもらったので、なおさらそう感じたのかもしれないですけど、いい展覧会でした。

○河原 ありがとうございます。にぎやかな感じのカラフルな作品と、あともう1つ部屋があって、モノクロの作品でというのをちょっと分けていたりだとか、そういう作品の並びが向き合うような形で、それぞれの風景がちょっとずつ重なり合うような、そういう構成にはしていたんですけども、スカッシュと言われると、ちょっと何か飛び跳ねているような、ざわざわしたような、そういう印象が。

○米田 スカッシュっていっても、けたたましいああいうんじゃないくて、本当に幾つものボールがずっと自分の周りを跳ね返っているような、そういう印象ですね。磯野さんの作品を見ていても、やっぱり辻さんの持っている何か、それこそこの言葉を使うと残響みたいなものの気配を感じながら見ているような感じもあるし、ほかのところもそうなんですけど、それぞれ違う作品が並んでいるはずなんだけど、何か急に1人の人が作ったいろんな作品の中に突っ込まれているような。

○河原 一体感のような。

○米田 そうそう。錯覚になったりとか、すごく面白いなと思って。

○河原 なるほど。

○米田 と感じながらうろうろしていました。(笑)

○河原 (笑) ありがとうございます。やっぱり、比較的作品自体がむき出しで展示していたのもあったので、そういう生々しさがより、多分米田さんの場合、特に実際の作品に、もう直接的に関わっていらっしゃるので、よりその作り方とか作ってきた背景とかも何となく匂うというか感じ取って、声が聞こえてきちゃうような、それがこだまという。(笑)

○米田 (笑) そうそう。筆音だったりとか。

○河原 筆音が多分よみがえってきちゃっているのかなというのが、今聞きながら。作っているからこそ。

○米田 ホチキスの音だったりとか、古久保さんの筆音だったりとか、磯野さんの紙をめくる音だったりとか、紙芝居を引く音だったりとか、何かいろんなものが、音だけじゃなくて、いろんなものがイメージとして。だから、さっき言った個性が際立っていて、表現が全部違っていたんで、それがきつとけんかせずに、何かざわざわと心地よい響きとなっ

てそこにあったといいますか。

○河原　すごくうれしいですね。確かに一人一人が結構強いけど、それぞれを見られるような、少し余白とかも意識しつつ。ありがたいですね、すごく。ちゃんと感想をもらったのは初めてかもですね。(笑)

○米田　(笑)

○河原　いや、そんなことないか。(笑)

今回「アール・ブリュット ゼン&ナウ」というのが、1つテーマを設定して展覧会をつくっている企画のシリーズだったので、このゼン&ナウの2回目が「風景」ということで設定をしまして、理由としては、まず、ギャラリーのある渋谷の街が、非常にいろいろな看板とか建物とか、今すごく開発が進んでいて、潰れて、また建てられてみたいなのがどんどん日々行われて、風景が変わっていく。そういう街の特性というか、特徴というのを少し展覧会にも関わらせたいなというところと、当時、まだコロナ禍で、人の少ない渋谷という珍しい状態だったので、逆に静けさのある街というのが魅力的に見えていたみたい、そういう個人的な気づきみたいなのも出発点としてありながら。

○米田　へー。

○河原　その風景というのが、誰でも何かを見たときに風景として切り取っているというか、特別なことじゃないんですけど、誰でも風景の記憶みたいなものが必ずあったりして、それがたわいもないものとか、ありふれたものというのがある種作品になっていくこのアール・ブリュットなり障害のある方の作品みたいなのところとの親和性みたいなのを少し感じたので、風景というテーマでこのゼン&ナウというシリーズをやってみたいなというのが始まりでありました。

○米田　あの場所にあるとね、美術館にあると、渋谷の街の中にあると、またちょっといろんな作品のチョイスとかも今みたいな感覚が入ってくるんですね。(笑)　面白いな。

○河原　まあ、いろいろこじつけで。(笑)　考えながらという感じで。

今お話ししていたんですけど、磯野貴之さんの作品をお借りしまして。

○米田　ありがとうございました。

○河原　出展させていただいて、磯野さんの作品は、ちょっと簡単に説明すると、ノートに、36冊分のノートに、ひたすら黒いペンで電柱とその電柱から延びている電線が無数に描かれていて、伺ったお話だと4万2,000本描かれていると。約それぐらい描かれているものを、米田さんがそれを全部束ねて1冊の、1冊っていう言い方も変なぐらいの塊にな

っているんですけども、太い大百科事典みたいな作品に、形にしたというものです。それを展覧会のときは1ページずつ撮影させていただいて、それをこま撮りのように回転させることで映像のようにして、それを、実物の作品と一緒に映像を展示するという形の空間の展覧会をさせていただいたという感じで。

○米田 いや、本当に大変なご苦勞をしていただいて。(笑)

○河原 (笑) 撮影をお願いしていた方とかとの作業だったんですけど、非常に楽しくて、基本的には電柱と電線が描かれていて、似たページがずっと続くわけなんですけど、やっぱりだんだん違うものがあったり、全然違う、基本的には水平に、左から右へという感じで電柱が描かれているんですけど、時々縦に。

○米田 はいはい、ありますよね。

○河原 ぐっとL字になって曲がっていくものが続いたりとか、電柱自体に看板の文字が描かれていたりとか、やっぱり同じように見えて、全然違う風景で、めくるとに磯野さんが見たであろう風景なり、そういったものを追体験していくような、そういう感覚が非常に面白かったので、あの面白さを、会場でめくっていただくのがちょっとできなかったのもので、それをぜひ見せたいと思って、ああいう映像の形で展示したという感じなんですけど。

この作品は、米田さんにちょっといろいろお伺いしたいんですけども。(笑)

○米田 いや、もう私も、ああいう映像になって、こういう改めて、頭の中では想像していましたが、やっぱり映像がつながっていて、ページが全部1つの作品として連なっていくというのを実感できるというのは、すごい展示をしてくださったなと思って、あれは本当にうれしかったです。

磯野さんは自閉傾向の方で、ちょっと行動障害とかがあって、なかなか人とコミュニケーションが取れない方なんですけど、電柱とか、パイプとか、排水管とか、ああいうようなものにすごくこだわりがある方で、何だろうとは思っているんですけど、何か物と物をつなぐものなのか、どこに行くか分からないものが好きなのか、ちょっとよく分からないんですけど、もう電柱が好きで、お母さんの車で学校の送迎とかをするときに、寝っ転がった車の窓越しに見える電柱が後ろにどんどん飛んでいくさまとかをずっと見ていて、お母さんが道に迷ったときとかは電柱で道案内できるぐらいの、何か私らには分からない、電柱ごとに顔があるというか、そこまでのこだわりを持っている人なんです。その人が、これは支援学校にいたときに描いた絵なんです。

○河原 ああ、在学中の。

○米田 うん。在学中に、突然こういうのを、何か電柱の絵を描き始めた。電柱はもともと好きで、よく落書きとかに描いていたんですよ。落書きが好きで、廊下の壁の床面のところから急に電柱が生えていたりとか、鉛筆で描いた。(笑)

○河原 (笑) 何かいたずら描きみたいなの。

○米田 そうそう。いたずら描きみたいなのが大好きなんですよ。ロッカーを開いたら、電柱とかいろんなのが描いてあったりとかというのが好きな人で。

○河原 なるほど。すごい。

○米田 人が見えない、見つけられないようなところに描くのが好きな人で。それで、うちでそういうのを描いたというのを聞いて、何か月か後とかにも、もう物すごい大量のものを描いているんだけど、どうしたらいいでしょうかみたいなことを聞いて、見せてもらったら、びっくりしてですね。(笑) もう本当にびっくりしましたね。

○河原 そのときは、もうノートがばらばらばらってある感じなんですか。

○米田 そうそう。一応、重ねて持ってきてはいたんですけど。

○河原 ああ、そうなんですね。(笑) その時点ですね。

○米田 そうそう。(笑) だけど、やっぱり何度も開いたり閉じたりしているせいで、外れていたりとか、表紙に穴が開いていたりとか、何かいろいろ、それでまた、自分で直そうと思ってセロテープでぐちゃぐちゃにしていたりとか。(笑)

○河原 (笑)

○米田 何か物すごい、もうむせ返るような思いが伝わってくるような作品で。(笑)

○河原 (笑) なるほど。

○米田 でも、すごく衝撃を受けたんですよ、何か。それを見たときに。見たことがない表現。私としては、周りの先生とかは電柱があって面白いぐらいの感じだったんだけど、私は電柱を無数に描くという行為自体も尋常じゃないと思ったし、無数の電柱なのに1本の電線があるというのも、何かちょっと考えられない視点だなと思って。頭では考えられるけれども、いざ表現しようということは誰もやったことがないんじゃないかなとかとも思いましたし、絵なのに、今言った追体験、自分の頭の中で追体験として構築し直さないと全容が見られない作品だったし、何か重ね合わせているのを見たら、立体作品のような異様な存在感があったし。

○河原 そうですね。

○米田 そうそう。(笑) これは何だろうと。本人はやっぱり、ばらけるといらいらするんですよ。

○河原 ああ、なるほど。

○米田 やっぱりそれが嫌みたいで。それだったらとじたほうがいいんじゃないということ、本人も納得して、それで本の形に一緒にしたんですけど。

○河原 そうか、じゃあ、やっぱりあれで一個という感じが、本人の磯野さんの中に確かにあるというか、強くあるという。

○米田 そう。1個の、本人の中で作品としてあったみたいですよ。だから、ああいうような描き方というのは今までしたことがなくて、それでお母さんがすごく心配していたんですよ。そればかり描いているから。

○河原 (笑) すごい。

○米田 だけど、本人は、本人いわく999ページだったかな、何かそこまで描いて、「終わった」って言って終わったらいいんですよ。

○河原 ああ、そこを何か目指していたような。なるほど。

○米田 一応完成したということで、もうきっちり描かなくなった、そこから先。

○河原 すごいな。すごいですね。(笑)

○米田 そうそう。(笑) それで、何かすごい、よく分からない不思議なことが起きていると思って。でも、すごくかっこいいなと思って、その表現しているさまが。すごくピュアな表現やと思って。好きなものを消化し尽くしたみたい。あつ、消化というか、昇華ですね。(笑)

○河原 そうですね。上げていますよね。(笑)

○米田 昇華のほうで。

○河原 昇っているほうで。

○米田 うん。だから、これは一緒に見ていて面白がっていた先生に、「これ、きっと世界行きますよ」って言っていたんですよ。

○河原 ああ、その、見たときから。

○米田 そうそうそう。だから、どう見ても世界に1個しかないものなんで、ちゃんとした人が見たら、きっと拾ってくれるというようなことを感じて。そうしたら、いろんなご縁がつながって、フランスの「KOMOREBI展」に行くことになって。

○河原 そのときのKOMOREBI展の、フランスのナントで展覧会を。

○米田 はい。

○河原 それもアール・ブリュットの作品をたくさん紹介している、日本の作品を紹介している展覧会だったと思うんですけど、それが初出しになるんですか、磯野さんの作品って。その前にも……

○米田 いや、ココペリの展覧会では何度か紹介していますね。ただ、やっぱり開いて見せていただけだったんで、その作品の異様さとかすごさというのを伝える展示ではなかったんですよ。

○河原 ああ、なるほど。

○米田 取りあえず展示することで、お母さんも本人も、ちょっと誰かが自分の作品を見て楽しんでいるということが伝わればいいということでやったので、あんまり。2回やったかな。2回目はちょっと作ったんですよ、短編の3分ぐらいのやつを。

○河原 ああ、見せていただいた形ですね。

○米田 そうそうそう。

○河原 でも、あれでも十分、中が見えるので、異様さがプラスされるというか。(笑)

○米田 (笑) それは、本人もすごく見入っていたので、「ああ、よかったな」と思ってた。あのとき、これはフランスの前のやつですけれども、直前にやった展覧会だったんですけど、あのときはたまたま電柱を造っている業者の人が見に来ていて。

○河原 なるほど。(笑) すごいたまたま。

○米田 そうそう。(笑) 何とか電力というところの系列の会社のところが見に来ていて、電柱というのは今どんどん減っていて、そういう中で、しかも電柱というものに着目するようなものじゃないと思っていたのに、ここに来たら電柱を描いてある作品があって、むちゃくちゃうれしかったということを言っていらっしゃっていて。(笑)

○河原 (笑) すごくピンポイントで見てほしい人に見られたというか。

○米田 そうそう。(笑) それで、自分も、ああそうか、電柱というのは発電所からずつつながって、鉄塔を通してつながって、家々まで行っていて、きっと、なるほど、これだけの電柱がもしかしたらあるかもしれないなというのを思いながら見ていたというのを聞いて、なるほど、関係者にも響く作品なんやと。(笑)

○河原 (笑) すごい関係者ですもんね。

○米田 そういう一方で、フランスとかではいろんな人が、ほかの作品が平面とかが多かったんで、什器の上に乗って、アクリル箱に入っている作品ってあんまりなかったんです

よ、KOMOREBIでやったとき。

○河原 ああ、なるほど。

○米田 だから、やっぱりちょっと物珍しさもあって、みんなが何だろうとって、のぞき見るような見方で見ていたところがあったんですけど、後で聞くと、ヨーロッパとかだと、電柱は全部地中に埋めてしまって、電線がないらしいんですよ、道路にあんまり。

○河原 なるほど。

○米田 電柱というものの自体があんまりないので、何かその物珍しさも手伝って、みんな見ていたというのがあったらしく。

○河原 かなり独自性というか、電柱のある国の風景というか。

○米田 そうそうそう。何かやっぱり子供とかがよく、じっと眺めているというのがすごく印象に残っていますね、私は。

○河原 あそこに、子供たちが、KOMOREBI展の風景写真で、見ているのとかありますよ。

○米田 全然どかないんで、「ああもう、いや、これは写真に撮っとかなきゃ」と思って撮ったんですよ。(笑)

○河原 (笑) 凝視していたと。

○米田 フランスの方はみんなね、本当に丁寧に作品を見られるから、時間をかけて皆さん一点一点見られる方ばかりだったんで、そういう面もあるのかもしれないですけど。でも、向こうの主催した館長さんとかも言っていましたけど、やっぱり「でんちゅうでんせん」そのものが作品としてどのジャンルにも属さないというのは現代アートなんだって言っていっちゃったのはすごく納得ができたというか、やっぱりちゃんとそういう見方で取り上げてくださるんだなというのは、やっぱりアール・ブリュットの世界というのは、いわゆるスキルとかテクニックという評価基準よりも、独創性とかほかにはないものというところで評価というのがしっかりとされているから、やっぱり誰にでもチャンスがあるというか、世界に進出するチャンスがあるというか、面白い。一本釣りではんって、家で落書きで描いていたものがぽんって行ってしまうような、そういうドラマも起こり得る世界なんだなというのを感じて、面白い世界だなと思いましたね。

○河原 なるほど。その海外の方がぐっと引かれた部分が、今おっしゃっていたみたいにメディアとしてどのジャンルにも属さない、絵画でもない、彫刻でもない、インスタレーションでもない。でも、画面を追っていくと、すごく映像的な、アニメーション的な部分もあるんだけど、すごく物質物質していて。



○米田 そうそうそう。

○河原 そういう特殊さももちろんありますよね。この線自体は、本当に電柱、電線しか描いていなくて、余白が大きいというか、紙の6割、7割ぐらいは余白みたいな感じで。本当に線だけで描かれているというのも、何か僕は見ていて、日本画的なのかなと思うんですけど。余白で語るみたいなのと、潔い線の表現みたいなのと。これだけいっぱい続いていくということも、何かちょっと儀式的な部分だったり、祈りのような、そういう静けさもあるし、何かそういう部分は非常に、逆に海外の人から見ると、より見たことのない存在というか、という感じにもなるのかなと。

○米田 確かに、余白はすごいと思いました、私も。

○河原 これだけたくさん描いているのに、これだけ余白を残す感じというのが。

○米田 何かね、大和絵に近い余白の使い方をちょっと感じますよね。普通だったら電柱を大きくして描きたくなりますよね、普通の方だったらね。

○河原 何かこの並びというか連なりというか、基本的に記憶で描いているというか、うちに帰ってからぐわっと、うちに帰ったら描いていたみたいなお話だったので。

○米田 また絶妙な大きさなんですよ、画面に占める。

○河原 そうですね。これも変わらずに、ずっとこの比率でずっと続いていますからね。

○米田 あとはね、本を開いたときに、紙の横のところにずっと線がずっと重なって、続いていくようなところが見えて。

○河原 あの断面のところ。

○米田 断面のところにね。「ああ、全部電線がつながっているんや」というのがそこで分かるというか。

○河原 そうですよ。開いただけでも、じっくり見ると、この点点点の、断面の点点点はまさかという恐ろしさというか。(笑)

○米田 そうそうそう。(笑)

○河原 そういうところも、見たときのインパクトもすごく大きいんですけど、中身を知るとより引き込まれてしまう。すごくシンプルな、ある種シンプルな作品なのに、そういう力強さがやはり魅力だったなと。

○米田 僕が彼のことが好きなのは、さっき「潔さ」という言葉が出たんですけど、別段、何か自分のスタイルを持ってずっとそればかり、ずっとやってきているとか、そういう人じゃないんですよ。何かもうそうですね、落書きの延長上にこの作品があって、自

分の中で電柱というものを描き尽くすという衝動が、多分ある日突然芽生えて、描き尽くして、終わって、それをまた別の視点からやろうとか、そういうのが全然なくて、今は電柱はまた元の扱いになって、何か壁の横に描くような存在になっているし。(笑)

○河原 (笑) なるほど。身近なものになっているというか。

○米田 そうそうそう。このときだけなんですよ。

○河原 それもまた珍しいことですよね。

○米田 そうなんです。だから、アーティストなんだけど、ほかの人みたいにライフワークとしてあるものじゃない。ライフワークとして出来上がった作品ではないというところなんだけど、ライフワークに匹敵するような強さを持っているというところで、何かすごくアール・ブリュットというのを説明するときに、幾つかの作家さんがいるんですけど、アール・ブリュットというのを説明するときはサンプルにする、その1人なんですよ。アール・ブリュットの本質を伝えられる人の1人というか。だから、もうきっと彼はこういう作品は多分描かない。今はもうヘッドホンで音楽を聞いて、それで体を揺らしているほうが楽しい生活に入ってしまったので。(笑)

○河原 なるほど。(笑) それが今も続いているというか。

○米田 今、それは続いている。

○河原 だから、ココペリには活動としては来ていないということですよ。

○米田 来ていないですね。

○河原 もう働いて過ごしているという。

○米田 一応、登録はしているんですよ。

○河原 ああ、そうですか。

○米田 アーティストとしての登録はしていて、なんですけど、今は福祉事業所のほうで、多分生活支援だと思うので、自分のできる範囲の工芸的なものとか、そういうものをやっているんだと思いますが、もしかしたら何もやっていないかもしれない。(笑)

○河原 (笑) 何もやらないスタイルで。

○米田 体を揺らしているだけかもしれない、もしかしたら。

○河原 なるほど。体を温めているみたいな。

○米田 そうそうそう。

○河原 突然、そういう状況だった方が、またこういった熱量のものを作ってしまうかもしれないのもありますよね。

○米田 そうそう。きっと蓄積がね、ある程度ボーダーに達したとき表現が始まるタイプの人なのかなという気はしますね。

○河原 結構、落書きとかそういったぼろっと言っちゃうような言葉の文字とか絵とかって、何か勢いとか、やったら終わりみたいな部類になると思うんですけど、この作品の「でんちゅうでんせん」のほうって、結果やったら終わりなんですけど、その期間がすごく長くて濃いという、その衝撃がやっぱりありますよね。そういうことをしていなかったというか……

○米田 人が急に始まって。

○河原 見えていなかったのか、何か不思議なんですけど。どこにこのパワーがあったんだという感じをすごく感じますね。

○米田 やっぱりおうちの方も、彼のそういう落書きとか、そういうささいな表現とかもすごく大事にしている人たちなんです。全部取ってある。全部保管している。

○河原 すごい。

○米田 そう。それで、そういう何か、さっき言った家を作ったりとかって、工作みたいなのが始まったりとかっていうのができるようにとって、ちゃんとスペースをつくってあげたりとか、そういうことが、ちゃんと土台ができていたんで、多分3か月思いっきり取り組めて、親御さんもそれをちゃんと見守っていたというようなところもあったんだと、多分。ちょっと、でも途中、大分不安になったと言っていましたよ、やっぱり。

○河原 そうですね。さっき、心配になったと言って。

○米田 そうそうそう。

○河原 なかなかならないですね。

○米田 やっぱり問題行動、これは本当にこのまま帰ってくるんだろうかみたいな感じでしたもの。というふうに思った。

○河原 確かに、画風的にも楽しい感じでもない。ただ、怖くもないんですけど、その絵の線の特徴が漫画っぽくて、ちょっとコミカルなので、印象としてはかわいらしい線だったりするんですけど、この量とこのミニマルさというか。

○米田 そうそう。やっていることがね、行に近いですからね。(笑)

○河原 行に近い。確かに、お母さんは心配になるかもみたいな。(笑) すごいな。なるほど。磯野さんのすごく魅力というか、人柄が出てきますね。

○米田 そういう作品を渋谷で飾ってもらえるというのは、またある意味、違う感慨があ

りましたね。何か都市で、本当にそういうものをテーマとした展覧会に呼んでもらえるというのは、すごくありがたいなと思っています。

○河原 ありがとうございます。

—了—